

京都大学ブータン友好プログラム：その歴史的展望

松沢哲郎

京都大学霊長類研究所

1958年の京都大学

探検大学と呼ばれる京都大学にとって、1958年はひととき輝かしい年だった。今西錦司(1902-1992)と伊谷純一郎(1926-2001)が最初のアフリカ探検をおこなった。桑原武夫(1904-1988)が京大士山岳会隊を率いて、カラコルムのチョゴリザ(7654 m)初登頂に成功した。西堀栄三郎(1903-1989)は南極越冬隊を率いて日本初の成功に導いた。つまり、アフリカ、ヒマラヤ、南極で、日本人としての存在感を国内外に示した年である。

今西、桑原、西堀は、パイオニアワークすなわち「初登頂の精神」の3つ兄だといえる。3人は、京都府立一中、第三高等学校、京都帝国大学の同級生だ。20歳のころから、剣岳チンネの初登攀や、北岳の冬季初登頂など国内の登山記録を作った。今西がリーダーとなり、活動を海外に広げた。戦前に、中朝国境の白頭山、中ロ国境の大興安嶺、ミクロネシアのポナベ島など、当時植民地支配下にあった未踏の地の探検を組織した。戦後は、日本が世界に先駆けて初登頂した8000 m 峰のマナスル(8163 m)や、カラコルムの氷河踏査に道を拓いた。

今西は、戦前に『生物の世界』を書き上げて独自の生物観を作り、棲み分けという現象を発見した。戦後は1948年に野生ニホンザルの研究を開始し、10年の蓄積をもってアフリカにでかけ、ゴリラやチンパンジーの研究をたちあげて、日本の霊長類学の祖となった。桑原は、フランス文学者で、人文科学研究所を拠点に共同研究方式を確立して、当時のオピニオンリーダーになった。西堀は、京大の助教授を辞めて東芝に入り、海軍の要請を受けて真空管ソラを作った。のちに原子力船むつの建設に携わり、品質管理(QC)という学問を開拓した。彼らは多方面で才を発揮し、前人未踏の場所に知的ニッチを構えた。

筆者は今西・桑原・西堀とちょうど半世紀近く

離れている。学部学生だったころ、彼らは70歳くらいだった。3人それぞれの思い出があるが、とりわけ西堀と縁が深い。1973年にネパールのヤルンカン(カンチェンジュンガ西峰、8505 m)の遠征に行った。初登頂した。その隊の70歳の隊長と最年少隊員である。

それぞれの知的ニッチの開拓

京大山岳部(KUAC)・京大士山岳会(AACK)の系譜には、彼らから10-15歳ほど離れて、直接その薫陶を受けた世代がいる。四手井綱英(1911-2009)、中尾佐助(1916-1993)、吉良龍夫(1919-)、川喜田二郎(1920-2009)、梅棹忠夫(1920-2010)らである。

四手井は、当時は林学と呼ばれていた学問を、現在の森林生態学へと脱皮させた。中尾は照葉樹林文化論や栽培植物起源論で名高い。吉良は生態学者で、日本熱帯生態学会はその名を冠して「吉良賞」を創設した。川喜田は、彼の頭文字をとってKJ法と呼ばれる発想法で一世を風靡した。梅棹は、文明の生態史観を掲げ、国立民族学博物館を作った。

今西や西堀が推進したマナスル登山計画は日本山岳会に移管され、1953年の第1次隊に、川喜田と中尾が2人だけの科学班として加わった。2人でネパールのアンアプルナ山群を周回して文化人類学や植物学の調査をした(川喜田、1997)。

1958年、アフリカ・ヒマラヤ・南極の偉業に隠れがちだが、小さな宝石にも似た魅力的な2つの野外調査がおこなわれた。川喜田の西北ネパールと、中尾のブータンである。

川喜田は隊長として「西北ネパール学術探検隊」を組織した。『鳥葬の国』(1960)という記念碑的著作になっている。川喜田は、白頭山、大興安嶺、マナスルで今西の薫陶を受けた。当時は大阪市立大学助教授である。この隊の足跡は、国立民俗学博物館の「ネパール写真データベース」(南真木

人氏の製作）にまとめられている。写真 3584 点、収集した標本資料 295 点の写真から成っている。鳥葬のようすを世界で初めてくわしく撮影した。（<http://htq.minpaku.ac.jp/databases/nepal/>）

もうひとつが中尾佐助による、日本人初のブータン調査である。『秘境ブータン』（中尾、1959、1971、2011）という古典的著作にまとまっている。中尾は、モンゴル・マナスル・カラコルム踏査などで今西の薫陶を受けた。当時は大阪府立大学助教授である。この野外調査がもとになって照葉樹林文化論を發展させ、『栽培植物と農耕の起源』（岩波新書、1966）、『農業起源をたずねる旅：ニジェールからナイルへ』（岩波書店同時代ライブラリー、1993 年）と続く。ブータンの約 1300 点のスライドが、大阪府立大学「中尾佐助スライドデータベース」（山口裕文氏らの製作）で公開されている。半世紀以上前のブータンを知るうえで貴重な映像資料である。<http://nakao-db.center.osakafu-u.ac.jp/>

川喜田も中尾も、後年さらに学殖を深める。しかし、この 1958 年の調査には、若い学究だけがもちえる初々しさがある。引き継がれるべきはその知的パイオニアワークだろう。

ブータン調査の歴史

ブータンと京大の最初の縁は、1957 年晩秋に第 3 代国王の王妃であるケサン・ワンチュク妃殿下が京都にいらした際に、京大教授の桑原や芦田譲治らが歓待したことに始まった。これが契機となって、翌 1958 年 6-11 月に中尾がブータンに入った。

その中尾が大阪府立大学で指導した学生だった西岡京治（1933-1992）が、JICA の農業指導員としてブータンに 1964 年に派遣された。彼の 28 年間に及ぶ農業指導は、ブータンに対する日本人の最も大きな貢献だろう。「ダショー」という英国流に言えば「サー」に該当する称号が与えられた。西岡農場を基点とする彼の功績は、同国民の心に今なお深く刻まれている（西岡・西岡、1998）。

1969 年 2 月に王妃の再度の来日があり、9 月には妃殿下の招待で桑原武夫と笹谷哲也の 2 名による短期訪問が実現し、それによって松尾稔（当時京大助教授のちに名大総長）の調査隊（1969 年 10-12 月）が派遣され、約 200 本のフィルムに当時の国の有様を収録している（桑原、1978）。

1981 年には、桑原・西堀・中尾・川喜田らが日本ブータン友好協会を設立した。初代会長は桑原である。1985 年には、堀了平の率いた京大山岳部の隊がブータンの未踏峰マサコン 7200 m に初登頂した（堀、1987）。

その後も現在に到るまで、京都大学はブータンで、氷河学、霊長類学、動物行動学、家畜遺伝学、比較教育学、フィールド医学などユニークな野外調査を展開している。しかし調査隊相互のつながりが希薄で、歴史的経緯についても忘却されているきらいがある（辻本、2000；松沢、1997；宮本、2009；安成・米本、1999）。

ブータン調査のこれまでの成果を振り返ると、率直に言って 3 つの難点が見える。第 1 は、縮小再生産である。先人の跡を追う研究であり、細分化されている。第 2 は、知的篡奪である。ブータンから標本、資料、写真、知識を持ち帰るだけで、そこで得た知見を先方に返していない。第 3 は、隊が単発で終わって、持続する意思と将来の展望が見えない。そこで、歴史の縦糸に総合大学という横糸をからめた、自分たちの世代のパイオニアワークを考えてみた。

京都大学ブータン友好プログラムの構想

京都大学が一国を相手にしたアウトリーチ活動を考えてほしい。松本紘総長のそうした希望を受けて、ブータンを対象にしたプロジェクト「京都大学ブータン友好プログラム」を構想した。健康・文化・安全・生態系・相互貢献という 5 つのキーワードを設定した。学術研究の最新成果をブータンに伝えるとともに、逆に我が国が必要とする知恵をブータンから学ぶ。一国まるごと全体を対象に、大学の本来の使命である研究・教育・社会貢献の 3 つの側面を一体として融合し、ブータンを学術のアリーナ（舞台）とする事業である。

ブータンと関わる 5 の視点のそれぞれについて概説する。

第 1 は、健康である。ブータンは、第 4 代国王が 1970 年代前半に、国民総生産（GNP）ではなく国民総幸福（GNH）という概念を打ち出した。グロス・ナショナル・ハッピーネス。国民総幸福という文言は 2008 年に制定された憲法に明記されている。日本国憲法の第 9 条は戦争の放棄だが、ブータン憲法第 9 条は「国家政策の原理」で、そ

の第2項にGNHという表現が登場し、「国家は国民総幸福の追求のために必要な諸条件の促進に努めなければならない」と定めた。

伝統的な暮らしを守りつつ、節度を保った観光立国をめざしている。京大東南アジア研究所の松林公蔵は、総合地球環境学研究所の奥宮清人が主導する「高所プロジェクト」と連携したフィールド医学調査をしている。医師（坂本龍太）の通年派遣が2010年8月に始まった。生活の質（QOL）に依拠した健康の概念を見直す企画である。そうした先行する事業に和して、京大が誇る、再生医科学やiPS研究やウイルス研究など最先端の医学研究からの寄与を探りたい。

第2は、文化である。チベット仏教を国教とする国で、文化的な伝統を守った暮らしをしている。国語（ゾンカ語）と英語教育に熱心で、人材育成に国の将来をかけている。

京大教育学研究科では、1995年の予備調査以来、科学研究費等で比較教育学の視点からの野外研究をおこない、親子関係や家族の心理学的研究も始めた。その他にも、ブータンをフィールドとした文化人類学的研究は学内外の多数の研究者によっておこなわれてきた。今後は、ブータンでの野外研究を基礎として、文化や教育や社会や経済や政治等についてさらに深く学ぶための調査をおこなう。

第3は、安全である。気候変動にともなう地球温暖化で、「氷河湖決壊」の危険にさらされている。1995年に訪れたとき、プナカ宮殿が補修中だった。前年に決壊の洪水で、濁流が壊したという。すでに学術研究の域を超えて、実践的かつ具体的対処が望まれている。

日本としてはJICAによる協力が現在進行中である。また名古屋大学の水圏科学のチーム（もともとは京大防災研究所のチーム）が、ヒマラヤ地域の氷河調査を続けている。そうした動きとも連動して、京都大学としてできる寄与を考えたい。ブータンは平坦な土地がほぼ皆無で、都市計画にもとづく安全で安心な街づくりのニーズがある。地滑りによる道路の補修や地震対策も必要だ。さらにはエネルギーや情報通信の問題がある。とくに水力発電が盛んで、クリーンエネルギーの創出と活用が望まれている。

第4は、自然である。標高約100メートルから

最高峰のガンカーブンスムの7541メートルまで、南北約250キロのあいだで、標高差7000メートルを超える垂直分布の国である。

この峻険な地形が世界に類例の無い手付かずの森を残した。そこには多様な動植物相がある。ターキン（ウシのなかま）、ジャコウジカ、レッサーパンダ、ユキヒョウ、冬虫夏草など、貴重な動植物の存在で知られる。京大の生物学者たちは、ランゲールやアッサムモンキーなど降雪地帯にすむサル類や、氷河の融雪と関連した表層藻類の研究や、ヤクとウシをかけあわせたゾー・ゾッキョの研究など家畜育種の研究や、最近では猿害防御を通じた人間とそれ以外の動物の共生の研究をおこなってきた。ブータンは、国土すべてが自然な森に囲まれ、照葉樹林文化の成立過程を知るうえできわめて重要な地理的要衝である。その自然を深く知り、それを守る試みにも参画したい。

第5は、相互貢献である。あまり一般に知られていないが、インドを除いて、日本はブータンにとって最大の援助国である。しかし、逆に、日本がブータンから学ぶことも多いだろう。一方的な経済支援ではない、一方的な知的篡奪ではない、イコールパートナーとしての相互貢献を展望したい。

そのためには、双方向的な学問の交流が重要だ。訪問し、招聘する。まず、日本の最先端の基礎科学研究の多様な成果をブータンの人々にわかりやすく発することで、これまでにない新たな領域での相互貢献が生じる可能性がある。逆に、調査一辺倒ではないさまざまな視点から、ブータンという国に内包されている多様な魅力をわれわれが看取することで、21世紀を展望する学問の展開が期待できる。

最後に付言すれば、これまでブータンとはまったく無縁だった学問分野にこそ、新しい連携の萌芽があるのではないだろうか。従来、とすれば、ブータンを一方的な調査対象と考えてきたきらいがある。一方的な調査は、限られた学問分野からの狭小な視点からの知的篡奪といわれてもしかたがない。

そうではなくて、ブータンとの接触を、そこから日本と世界とその全体的な将来を考える契機とする、という視点もあるだろう。じつは、どんな学問分野であっても、ブータンを対象とした研究・

教育・社会貢献の事業に参画できるはずだ。また、そのためには、継続した努力を重ねる次世代の育成も欠かせない。若い学部学生・大学院生を、本事業に組み込むことで、早くから自然やフィールドに興味をもった、ユニークな人材育成ができるだろう。

ブータンはおとぎの国ではない。北を中国、南をインドという大国にはさまれて、この小さな国が生き延びていくのは並大抵ではない。ブータンという存在そのものが奇跡と言える。この魅力的な国に対して、京都大学は歴史的にも最も深く関わってきた。しかしその貢献は必ずしも人々の目に見えていない。本プログラムを端緒とした、ブータンにおける総合的な「学術アリーナ」の構築、つまり研究・教育・社会貢献の一体となった友好プログラムの実施を展望した。

プログラムの発足と経過：最初の2年間

2010年、3月14日、京都大学の研究所群が主催する附置研究所シンポジウム開催時に、「1国を対象としたアウトリーチ活動」を考えてほしいという松本紘総長の意を受けて、吉川潔副学長からの呼びかけがあった。それに応じて、研究所長の有志が懇談して、京都大学ブータン友好プログラムの初動計画を立案した。

4月24日、吉田泉殿自然学セミナー「ブータンから学ぶ」を開催した。本プロジェクトの定例会合の初回である。京大の吉田泉殿に関係者が集って情報交換と意見交換をおこなった。概要は以下のとおり。

「地球社会の調和ある共存に貢献する」、それが京都大学の掲げる理念である。「人間と自然」という二分法と訣別し、人間中心の世界観から脱して、人間を含めた「自然」をどのように理解するべきか。本セミナーは、「自然そのまると全体」を捉えるなかで、「人間とは何か」という人間の本性についての深い理解をめざしている。

吉田泉殿の「堀りごたつと畳」の部屋で、寝そべってくつろぎながら、自由に意見を交換する場である。「人間とは何か」をブータンという国を契機に考えたい。今回は、ブータンを知的なアリーナに見立てて、そこからわれわれは何を学べるのかを考えた。

当日の話題提供の概要を以下に記す。

仲野徹（大阪大学）は、最新のブータンの写真を豊富な写真で紹介した。松林公蔵は、マサコン峰登頂からフィールド医学への展開を紹介し、国民総幸福について言及した。宮本万里は、2002年から毎年ブータンに行っている。2004年末からの1年間の滞在を中心に文化人類学的調査の概要を話した。彼女の報告で、初めて、ブータン北東部の国境地帯が中国に「割譲」されたことを聞いた。思い当たることがあった。日中のあいだに尖閣列島問題がある。中国人留学生に聞いたのだが、中国は26か国と国境を接しているそうだが、領土問題に腐心するのは中国の病なのだろう。幸島司郎は、自身の関わった氷河湖調査の紹介をした。川本芳さんは、過去5回のブータン調査の中からブータンにいるサル類6種を紹介するとともに、いわゆる猿害をもとに人間との共存についての試みを紹介した。辻本雅史はブータン研究における教育学の視点からの重要性を指摘し、それを引き取って杉本均が教育と幸福感に関する調査結果を紹介した。月原敏博（福井大学）は、松林らとともにマサコン峰を登頂したが、首都ティンブーの食物事情やごみ処理といったユニークな視点からの紹介をした。最後に、山川宗玄老師（正眼寺）が、臨済禪の立場から、仏法というのは「徹底の教え」であるという話をした。ブータン人の死生観にかかわるお話でもあった。なお、話題提供者以外の討論参加者は、小林慎太郎（地球環境学堂）ほかの方々だった。こうした定期会合をもちつつ、平成22年度に4つの訪問団を派遣することとなった。同様に、平成23年度も4つの訪問団を派遣した。すなわち事業開始後の最初の2年間で合計8訪問団、延べ50名の京大の教職員と大学院生・学部生がブータンを経験したことになる。

第1回訪問団の派遣の概要

第1回訪問団としてブータンを再訪した。隊の構成は、松沢哲郎（霊長類研究所・教授）、松林公蔵（東南アジア研究所・教授）、吉川左紀子（こころの未来研究センター・教授）、中嶋智之（経済研究所・准教授）、小林繁男（アジア・アフリカ地域研究研究科・教授）、八木定行（霊長類研究所・事務長）、以上合計6名である。

日程は、2010年10月15日出発、22日帰国。

派遣目的として、半世紀前から連綿と続いてきた京都大学の学術調査の縦横の連携を図る。さらにはブータン王立大学等との関係を強化して、今後のブータンでの研究・教育・社会貢献を円滑に進めることにあった。ブータンにおいて健康・文化・生物多様性等をテーマにして、日本人若手研究者が今後ブータンで主導的に活躍できる場を形成する。現地では、要人との面談をおこなうとともに、ブータン王立大学等と京都大学の連携を模索した。

行動概要として、前国王のジグミ・シンギ・ワンチュク殿下に6名全員が拝謁して、約1時間、同国憲法第9条に書き込まれた国民総幸福(GNH)の理念等を中心に歓談した。会談を終わってお別れのときに「ブータンとの永い関係をもつ京都大学が、日本とブータンの両国友好の推進に尽力するよう」期待のお言葉をいただいた。具体的には、1958年以來の京大関係者の野外調査記録とくに写真等のビジュアルアーカイブの整理と寄贈を依頼された。同国には遺されていない、ブータンの近代化を示す貴重な映像資料だからである。

その他の関係者としては、国会議員・副議長(ASAFAS 卒業者)、教育省、環境 NGO などの方々とお会いして意見交換した。また、教育省、外務省、ブータン王立大学・パロ教育研究所、ブータン王立大学・経営研究センター、王立ティンブール大学、ブータン研究センター、を訪問して視察するとともに意見交換した。

パロのタジュ小学校を訪問して授業参観した。幼稚園から大学まで授業料は無料である。授業は、国語のゾンカ語の授業以外、全部英語でおこなわれている。また、国語・英語・算数・環境教育の四科目が毎日授業されていた。

その他、ブナカ宮殿、パロ宮殿の国立博物館、ティンブールの国立図書館、タクツァン寺院等を見学した。ブータンと日本は国交を取り結んで来年2011年に25周年を迎える。しかし日本の在外公館のない国なので、その代替の役割を果たしている JICA 事務所を訪問して、現在の活動状況をおたずねした。

前国王へのインタビュー

一連の改革を主導してきた前国王であるジグミ・シンギ・ワンチュク殿下から直接お話を聞

きした。その要点を記す。

ブータン憲法の第九条は、「国民総幸福 GNH」である。国が追求する理念として掲げた。国王によれば、GNH を構成する4つの柱がある。文化、自然、経済、政治である。これが幸福を定義する視点だともいえる。

文化とは、チベット仏教に依拠した伝統的な暮らしを守ることだ。男性はゴ、女性はキラと呼ばれる日本の着物に似た服装の着用が義務付けられている。国土の大部分は山村という趣で、三代の親子が同居する大家族の暮らしが残っている。弓が国技で、ティンブールでもブナカでもパロでも、街中で弓を射る風景を見た。ゆうに100メートルは離れた的を射る。それを見物して楽しむ。

自然とは、類例のない垂直分布をもった豊かな自然環境である。森林を守る。外来種を入れない方針をもっているそうだ。緑であれば何でもよいわけではない。自国に自生する木々を守り育てようとしている。山国の傾斜を利用して水力発電をしている。豊かな水がエネルギー資源である。ソーラーパネルも普及して、クリーンエネルギーを追及している。地球温暖化による氷河湖の決壊という問題に直面しているから環境問題に敏感だ。

経済は、豊かでなければいけない。実際に、インドより一人あたりの国民総所得は高い。建設現場や道路工事で働く人々はインドからの労働者だった。山国で、とくに鉱物資源はない。農業も自国の消費をまかなう程度で、逆に、多くの農産物がや日用品がインドから入っている。主要な財源として、水力発電したものをインドに売電している。観光立国に力を入れている。1人1日200ドルという公定価格になっている。欧米からの観光客が多い。

政治とは、民主主義的な政体をさす。憲法を制定して立憲君主制に移行した。行政は経済活動のルールを定める。その範囲で、経済活動は自由におこなわれるべきで、行政が経済活動そのものにおこなわれるべきではないという考えだそうだ。

前国王の話で興味ぶかかったのは、国民総幸福という命名の由来だ。1972年に、父王の死を受けて16歳で即位した。国のかじ取りをしていくうえでの理念を考えた。まず、西欧でもちいられるGNPすなわち国民総生産はおかしいと考えた。

端的な例を以下のように挙げて説明してくれた。家族のために働くことはとても大事だ。しかし、そうした家庭での労働という重要な要素が、このGNPという指標には反映されない。ベビーシッターを雇って、それに給料を払えば、国民総生産GNPは高くなる。しかし同じことを家族が相互扶助でおこなってもそれは評価されない。そうだとしたら、指標そのものがまちがっているのではないか。そう考えたのである。

最初に思いついた用語は、「コンテンツネス」、すなわち満足という尺度と表現だそうだ。悪くはない。しかしインパクトに欠ける。考えているうちに「ハピネス」、すなわち幸福という言葉に行きついたという。国がめざすべきことは、国民の総幸福である。人の目をひく、アイキャッチングな目標は重要だ。「最小不幸社会をめざす」というのと、「国民総幸福をめざす」という2つのうたい文句のうち、どちらが優れているかは自明だろう。

即位したとき、国民の識字率は約20パーセントだった。これを高めるために教育を進めた。現在の識字率は約60パーセントである。識字率の向上を待って、憲法を発布した。文字が読めなければ、どんなに優れた理念も国民に浸透しないからだ。

つまり着想から30余年をかけて、まず識字率の向上を図った。それを待って憲法を発布し、選挙をおこない、議会制民主主義を導入した。単なる思い付きで唱えたGNHではない。周到に準備され、満を持して実行されたのである。

しかも立憲君主制への移行を前に、退位して、王位を長男に譲った。これは自らの生い立ちによるそうだ。父の第3代国王が、海外訪問中のケニアで客死した。突然、16歳で国王になった。いきなり国のかじ取りを任されて、父王に相談したいと思う場面が多々あったという。自分の息子にはそういう思いをさせたくない。それで、譲位して、息子に助言しながら改革を進めている。

王宮は、山間の街ティンブーの高台にある。毎日、自転車でサイクリングを楽しむそうだ。現国王と一緒に親子で楽しむこともあるという。国王が自転車でゆっくりと坂道をのぼる。その横を、一般の人々の自動車が追い越してゆく。そうした光景を話しながら、前国王は目を細めていた。

ブータンの初等教育

教育に力を入れている。すでに述べたように、小学校から大学まで、公教育はすべて無料である。パロの小学校の授業参観をした。一年生から六年生までだが、PPとよばれる幼稚園も併設されている。つまり年長組が始まる七年のクラス編成である。

教室で、生徒はグループ編成になっていた。かつての日本の教室のように、教師がいて、全員がそちらをみる机配置ではない。七―八人で一班を構成している。

教師は、黒板の前に立っていたり、室内を歩き回ったりする。また、グループでまとまっているので、そのあいだを歩きやすい。授業はすべて英語でおこなわれる。これはPPからしてそうだった。全部の授業が英語である。唯一の例外はゾンカ語と呼ばれる国語だ。チベット語に近い語彙と文字である。小学校の一年生の英語の授業は、ちょうど動詞の過去形を教えていた。現在形からどのように過去形を作るか。先生は英語でそれを説明し、一年生が英語で答える。

グループ学習なので、グループの中での助け合いも目についた。隣の子どものまちがいを指摘し、助けてあげる。いわゆる私語だが、まったく気にならない。教室がざわめいているというより、自然な活気に満ちあふれているというのが実感だ。

さあ、歌を歌いましょう。歌がじょうずに取り入れられていた。ざわついていた教室がその一瞬でひとつにまとまる。もちろんすべて英語の歌である。歌詞として覚えることで、正しい発音と用法が記憶にしっかり定着するだろう。しかも、歌には振りがついている。手を頭にやっ、胸にあてて、前に突き出して。身振り手振りを交えながら、皆で大声を出して一斉に歌う。楽しい気持ち、声に出す、体で覚える。こうした感性に訴えた記憶術は、非常に合理的だと思った。

すでに述べたように、小学校のすべての学年で、毎日必ず取り組む4教科がある。国語、英語、算数、そして環境教育である。環境教育に重きが置かれているのが興味深い。GNHも、環境教育という枠組みの中で、ふだんの暮らしと結びつけて教えられている。

水や電気を無駄にしない。実際に学校の場で節約を実践し、その実践のなかでそのもつ意味を説

く。現実の生活から理念を教える。

教室の壁には、アルファベットの26文字と同様に、GNHの要点が大書されていた。先に述べたように、GNHはブータン国憲法の第9条である。ひるがえって日本の教育現場を見たとき、小学校の教室の壁に憲法が書かれているだろうか。憲法は、国の基本となる約束だ。そこに国の掲げる理念が書かれている。GNHという理念が書かれた文章を毎日読み、日々の環境教育と実践を通じて学んでいる。かんたんというと、憲法に添った暮らしを実践しつつ学んでいるのだ。

1995年、15年前のブータン旅行では、主として田舎のほうを歩き回った。伝統的な暮らしといえば聞こえはよいが、貧しさも際立っていた印象がある。冬はきつと寒かろうと思った。今回と同様に小学校も見たし、男の子だけが学ぶ僧院も訪れた。

こうして15年を隔ててみると、全体として国の明るさが増している。もちろん、ティンプーの街は激変していたが、それだけではない。たぶん国民総幸福GNHと標榜するものが人々の中に広くいきわたっているからだろう。幸福ということ、日々、学校教育の中で問うている。それが重要なのかなと思った。

自分が受けてきた日本の学校教育を振り返ってみた。「人間とは何か」「幸福とは何か」、日々の授業の中で、それを問われたこともないし、考えたこともなかったように思う。ブータンでは、人間にとって幸福とは何か、ということが日々実践を通じて教えられていた。幸福という名の「青い鳥」を探して旅に出たチルチルとミチルの話がある。いろいろとみて回った挙句、幸福の鳥は自分たちの家にいたという。ブータンを旅して一番驚いたことは、その文化でも伝統的な暮らしでも、珍奇な自然でもない。わたしにとっては小学校の教育現場の雰囲気だった。学校教育の中で、「人間にとって幸福とは何か」ということが、日々、繰り返し、繰り返し、問われていた。日々の暮らしの中から幸福を考える。考えてみれば、当たり前のことだが、それがごく当たり前におこなわれていた。このヒマラヤの小国の近代化の取り組みをこれからも見守っていききたい。そこから、人間にとっての幸福とは何かを考えてみたいと思った。

結語

京都大学ブータン友好プログラムの最初の2年間で、合計8隊、延べ50名の教職員・学生等がブータンを訪問したことになる。事業が緒に着いたばかりの2011年3月11日に、東北大地震があった。もはや震災を抜きにして何事も語れない。ブータンを体験することが、じつは日本の将来に想像をめぐらすことになる。そういうプログラムに育っていくよう努力したい。京都大学ブータン友好プログラムの活動については、そのホームページで公開している。ぜひ参照されたい (<http://www.kyoto-bhutan.org>)。なお、本稿は、著者の手によって2011年公表された2つの論考『科学』『発達』を併せて、それをもとに推敲を加えたものである。

末尾になったが、京都大学ブータン友好プログラムの実施にあたっては、松本絃総長や吉川潔副学長はじめ京都大学の関係各位のご支援を受けた。ここに深く感謝したい。平成22-23年度の実施については全学経費の支援を受けた。また霊長類研究所からの参加者については、日本学術振興会の支援するITP(若手国際ナショナルプログラム)等に依拠した霊長類研究所HOPE事業からの支援を受けた。また、平成23年度からは、霊長類研究所の特別経費プロジェクト「人間の進化」のもと、医師の西澤和子を研究員として雇用し、ティンプー王立病院に通年派遣している。また平成24年度は、京都大学教育研究振興財団の助成を得て、大学院生と学部生8名分の旅費が措置された。こうした関係各方面からのご支援に対して、記して感謝の意を表したい。

引用文献

- 川喜田二郎、『川喜田二郎著作集 第11巻 チベット文明研究』中央公論社、1997年。
- 桑原武夫、『ブータン横断紀行』、講談社、1978年。
- 辻本雅史編、京都大学ブータン教育調査隊1997-1999研究報告、ヒマラヤ学誌(京都大学ヒマラヤ研究会編)、7号、1-180、2000年。
- 中尾佐助、『秘境ブータン』(現代教養文庫) 社会思想社、1971年。
- 西岡京治・西岡里子、『ブータン 神秘的国』NTT出版、1998年。
- 堀了平、『偉大なる獅子マサ・コン』講談社、1987年。

松沢哲郎、ブータンの初等教育、『ヒマラヤ学誌』、
6号、1997年。

松沢哲郎、ブータンと国民総幸福、『発達』、2011
年。

松沢哲郎、京都大学とブータンの関わり、『科学』、
2011年。

宮本万理、『自然保護をめぐる文化の政治：ブー
タン牧畜民の生活・信仰・環境政策』、風響社、
2009年。

安成哲三・米本昌平編、『地球環境とアジア』（岩
波講座 地球環境学 2）岩波書店、1999年。

Summary

Kyoto University Bhutan Friendship Program: An Overview in the Historical Context

Tetsuro Matsuzawa

Primate Research Institute, Kyoto University

This article aims to describe the project called “Kyoto University Bhutan Friendship Program (KU-Bhutan)” in the historical perspective. KU-Bhutan started in 2010, as a unique outreach activity of the university. Kyoto University is known as the pioneering fieldworks. In the fall of 1957, the late Prof. Takeo Kuwabara and the late Prof. Johji Ashida welcome the third queen of Bhutan in Kyoto when there was not yet any formal diplomatic relationship between Japan and Bhutan. This was the first step to Bhutan that was followed by the first survey of Bhutan by Prof. Sasuke Nakao in 1958. Since then, there has been a lot of expeditions from Kyoto University to Bhutan. KU-Bhutan aims to revitalize the tradition and enforce the connection between Kyoto University and Bhutan. The project consists of five major topics; Health including the GNH issue, Culture and Education, Nature and Ecosystem, Safety and Security, and Mutual contribution. In the first two fiscal years in 2010 and 2011, the program sent 8 parties of 50 members in total including professors, administration staffs, graduate students and undergraduate students. The KU-Bhutan program will continue to be a heuristic approach toward understanding Bhutan as a whole.